

# 令和5年度 学校評価 学校関係者評価書

学校園名	三木市立緑が丘中学校
------	------------

## 1 学校教育目標

自ら考え 正しい行動のできる 心豊かな生徒の育成
--------------------------

## 2 本年度の重点目標

(1) めざす学校像	① 安全で安心して過ごせる学校 ② 思いやりにあふれ、人権への配慮が行き届いた学校 ③ 自主的・意欲的な活動を通して、子どもたちが自己実現できる学校
(2) めざす生徒像	① 知・徳・体の調和がとれ、自立して自らの夢や志の実現に努力する生徒 ② 自分を大切にするとともに、友だちの喜びを自分のことのように喜べる生徒 ③ 目標を持ち、その実現に向けて何が必要かを考える生徒
(3) めざす教師像	① 確かな人権感覚を持ち、子どもたちに寄り添い、伸ばす教師 ② 子どもたちの自己実現を助け、自立した子どもたちを育てる教師

## 3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	①学力向上のためのわかる授業づくり ②補充学習や家庭学習の充実による基礎学力の定着	①本時の授業の流れ、目標を明示することで、生徒自身が何を学ぶのかを理解して学習することができた。 ①教師相互の授業参観により、生徒への取り組みませ方、発問の仕方を改善することができた。 ①個別最適な学びの実践として自由進度学習を取り入れた。 ①タブレットを活用した学びあいについてまだまだ工夫を要する。 ①週30コマを基本とする運用で授業時数を確保することができた。 ②夏季休業中の課題を精査し、自分たちで考え課題に取り組ませた。 ②長期休業中や受験前に補充学習を行った。	B	①テーマを設定した上で相互授業参観を実施し、授業改善に取り組む。 ①タブレット端末を活用した授業法についての研修を行い、毎回の授業で生徒も教職員も効果的に活用できるようにする。 ②課題を減らすだけでなく全ての生徒が自分で考え自分に合った学びができるよう適切な支援を行う。 ②デジタルドリルを活用し、自分に適した課題を選び自分で考えて学習する習慣を身につせさせる。 ②家庭と協力し、長期休業中以外も自ら学習に取り組む習慣をつけさせる。
生徒指導	①予防的生徒指導の充実 ②いじめ対策、不登校対策の充実	①予防的生徒指導を意識した情報モラルや薬物乱用防止に関する講演会を実施した。 ①②年2回のいじめアンケート、教育相談旬間を通して生徒に寄り添い生徒理解に努めた。 ①「きまりを意識しよう週間」を行い生徒の自治意識を高め生活のきまりを变えることにつなげることができた。 ①定期的に生徒指導委員会及び不登校対策委員会を開催するとともに、回覧により全職員で情報を共有した。 ②フォローアップ教室について職員で共通理解して運営した。学習以外でも来室した生徒と話すことで生徒の内面理解に努めた。	A	①3年間を見通して、講演会等を実施し生徒の意識の高揚を目指す。 ①②生徒が相談しやすい環境づくりに努めるとともに、得た情報を共有し適切な対応を行う。 ①日常から「生活のきまり」等ルールを守る意識を生徒、教師共に高める。 ②不登校の原因の複雑化・多様化により、対応が難しいケースが増加している。それぞれのケースに応じて専門家や専門機関、外部の施設と連携をすすめる。 ②チーム学校として生徒・保護者の支援を行い不登校生徒に対応する。そのためにもSCやSSWと連携し、アドバイスを受けながらより良い対応を協議する。 ②フォローアップ教室の運営を工夫し、不登校生徒が安心して登校できる体制を作る。
特別活動	①生徒の主体的な活動の推進 ②各種行事の活性化	①担任を中心にソーシャルスキルトレーニング等、各学年の実態に即した活動を行った。 ①生徒会を中心に校則の見直しをすすめるとともに、ルールを守る意識を高める取組を行った。 ①②各委員会で学校の実態に沿った活動を企画し、実行した。 ①②体育祭や文化祭で生徒の活躍する場面を設定するなど企画運営に参加させた。 ②コロナ禍が明け、文化祭など全校生徒で取り組む学校行事を行うことができた。内容についても取捨選択をし、新しい取り組みになるよう努めた。	A	①1年間、生徒の成長を見据えた学級づくりに努める。 ①生徒が安心して生活できるよう違いを認め他者を大切にす学級風土づくりを目指す。 ①学校のルール変更を一つの機会とし、何が大切なのかを生徒に問い続け自ら考え、判断して正しい行動のとれる生徒を育成する。 ②学校行事に生徒が参画する機会を設け、生徒に行事を創り上げる意識を高めさせる。
道徳教育 人権教育	①道徳教育の充実 ②人権意識の向上	①生徒の思考を深めさせる発問の方法をテーマに校内研修会を実施し、研修を深めることができた。 ①ローテーション授業を行うことで教師の授業力向上につながった。 ②6月、11月に週ごとに重点テーマを設定して人権強化月間を実施した。 ②保護者にも参加いただき人権意見発表会を実施し、共に考える機会となった。 ②同和教育三木市指定教材の実施については学年ごとの実施になった。	B	①教科横断的な視点に立った道徳教育の在り方を検討し、実践につなげる。 ①特に発問について工夫し、生徒の思考を深める方法を研修する。 ②6、11月の問題行動が多い時期に、実施する人権尊重月間の取組を学級・学年経営の一環として位置づけ浸透させる。 ②同和教育三木市指定教材についての研修を行い授業実践力を身につける。

## 4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

○生徒90%、保護者等79%、教職員100%が回答しており、学校関係者の意見が反映されている評価書といえる。  ○昨年度の評価値との比較を行い、向上した項目と、課題が残る項目がわかりやすい評価になっている。  ○三者比較(生徒・保護者・教職員)を行い、それぞれの立場の意見を分析し、評価につなげている。
---

## 5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
学校は自主的に学ぶ生徒の育成と家庭学習時間確保の観点で不十分と考えており、評価Bは妥当である。 しかし、ICTの活用、一斉授業から自由進度学習への転換、個別最適化学習の実施、長期休業中の補習、進路実現に向けた学習指導などの取組を行っていることは評価できる。 様々な施策と生徒の現状を見定め、目標や伸ばしたい能力を適切に設定することが重要と考える。
評価Aは妥当である。積極的に外部の専門機関を活用し、講演会や研修会を行っていることは評価できる。また、ネットモラルや薬物乱用防止等の講演会を実施し、生徒指導に関する問題を未然に防止する役割を果たしていると考えられる。 学校はきめ細やかな面談の実施、校則の見直し、ストレス緩和に関する授業、フォローアップ教室などの取組を行っているが、数値評価ではわからない生徒の内面理解などの部分は、家庭と学校が連携し、改善につながることを期待したい。 家庭と学校が更に連携を深め、改善につなげられるよう努めていただきたい。
評価Aは妥当である。3年ぶりにほぼすべての行事がフル開催できていた。コロナ以前と変わらず学校行事は充実しており、生徒が主体的に活動できていることは評価できる。また、1日で行っていた行事を午前中開催にするなど、問題点を精査し、上手く改善した形で実施していることも評価できる。学校行事を通して、生徒が互いに感動を与え、感じることができたことも特別活動の役割を十分に果たしていると考えられる。
評価Bは妥当であるが、Aに近いBと思われる。人権週間、人権作文発表会、人権講演会を全校生徒を対象に実施しており、生徒の人権意識の向上に向けた取組ができていると考えられる。 また、学校生活の様々な場面においても道徳・人権に関する指導ができていたことも評価できる。 学校は教職員の自己評価が低いことを課題として認識できており、道徳教育の充実のための研究授業と研修会を実施し、指導力向上を目指している。次年度も継続をお願いしたい。

<p>特別支援教育</p>	<p>①支援を要する生徒の理解と支援の充実 ②交流を通じた学びの充実</p>	<p>①職員間で情報交換を行い、支援方法や指導方法を確認しながら支援を行うことができた。 ①指導補助員や学校生活支援教員と連携し、支援が必要な生徒に効果的に関わることができた。 ①SCやSSWIに積極的に関わってもらい対応についてのアドバイスを受けた。 ①将来を見据えた進路を本人や保護者と一緒に考えることができた。 ②同学年の生徒を中心に、行事や授業において多くの交流を持つことができた。 ②パラアスリート交流会に参加しパラスポーツへの意識を高めた。 ②特別支援学校とは、学期に1回の居住地交流、2学期に地域校交流を実施した。</p>	<p>B</p>	<p>①支援を必要とする生徒が支援を受けることに抵抗を感じることはないように本人・保護者に丁寧に説明するとともに違いを受け入れる学級風土を醸成する。 ①生徒や保護者の願いに寄り添い支援をすすめる。 ①多様な事案に対応するためにSC、SSWを有効に活用する。 ②交流行事の時間設定や中学校のカリキュラム内での効果的な実施について検討し交流を継続していく。</p>	<p>評価Bは妥当である。近隣の特別支援学校との交流事業を定期的実施し、充実した活動を行うことができたことは生徒の特別支援教育への理解につながったと考える。また、パラアスリートとの交流会で技術や取組などを実際に目にしたことは、生徒の内面的な成長につながったと思われる。しかし、教室や授業において、支援を必要とする生徒との関わり方で課題が残る部分があり、今後の課題としていただきたい。</p>
<p>家庭・地域との連携</p>	<p>①家庭との連携強化 ②学校からの情報発信や学校公開による開かれた学校づくり</p>	<p>①地域人材を活用した水墨画教室や書道教室、花壇植栽などの活動を通して、地域との連携を深めることができた。 ①体育祭、オープンスクール、文化祭等を保護者を招いて実施することができた。 ①担任を中心に教職員と家庭との連絡を密にとり、情報交流をして連携を強化することができた。 ②学校のホームページを通して、学校での活動を積極的に発信することができた。 ②学校通信、学年通信、学級通信を通して、情報発信を行うことができた。</p>	<p>B</p>	<p>①学校運営協議会委員の企画や運営により地域と学校の連携を深め学校を支える活動をさらに増やしていく。 ①②開かれた学校となるよう授業参観やオープンスクールの在り方を検討する。 ②学校の活動に加えて学校運営を行う上で必要とすることを積極的に発信し、地域の協力につなげる。 ②地域行事に積極的に参加することで学校について知ってもらい気軽に学校に足を運んでもらえるよう努める。</p>	<p>評価Bは妥当である。家庭と学校の評価に差があるが、コロナ禍により、家庭・地域との関わりが少なかったことが要因として考えられる。今後、時間をかけて高評価に繋げていってほしい。学校は授業参観の開催、地域の文化祭への参加など、可能な限り地域との関わりを持ち、HP、学校通信、情報配信ソフトなどを活用して情報発信ができています。今後も積極的に教育活動を校外に発信し、家庭・地域との連携強化につなげてほしい。</p>
<p>教職員の育成</p>	<p>①研究授業・研修会の充実 ②生徒理解に努める教職員の育成</p>	<p>①三木モデルについて講師を招聘し研修するとともに新提案の学習展開案を用いて授業研究を行った。 ①校区の小学校と連携し9年間を見据えたカリキュラム作りに取り組んだ。 ①授業参観週間を6回実施し、授業力向上を目指した。 ①8月(単元設計)と1月(道徳教育)の2回、講師を招いて校内研修を行った。 ②生徒指導委員会は週1回、不登校対策委員会月1回開催し、学年内で周知するとともに、職員会議でも情報共有を行った。 ②サポート教室や保健室対応の教職員を毎時間割り当て、確実に対応できる体制を構築した。 ②カウンセリング旬間や三者懇談などで生徒、保護者からの話を聞く機会を作り、生徒の背景を把握するよう努めた。</p>	<p>B</p>	<p>①三木モデルについての共通理解を深め、目指す学びの形を実践できるよう努める。 ①相互授業参観を一つのきっかけとして、普段の授業を気軽に参観し意見交流ができる体制づくりを行う。 ①個別最適な学びの実現に向け自由進度学習やデジタルドリルの活用について研修を進める。 ②カウンセリングマインドについての研修を行うなど思いを聞き出す手法を身に付ける。 ②不登校や支援を要する生徒に対する支援について、SC、SSW等と協働して取り組む。</p>	<p>評価Bは妥当である。現代の教師は多忙かつ求められる資質・能力が増加しており、資質向上研修の時間を設定しにくくなっている現状は理解できる。しかし、教師の指導力向上が生徒の資質向上につながるという視点から、適度で、適切な研修計画を立案し、実行していただきたい。また、教師がそれぞれの得意分野を伸ばし、エキスパートを育成するという学校の姿勢も評価できる。</p>